

世界の日本研究

イタリアの日本研究

ボナヴェントゥーラ・ルベルティ (Bonaventura Ruperti)

(ヴェネツィア、「カ・フォスカリ」大学アジア・地中海アフリカ学科教授)

イタリアと日本との交流

おそらく、ヨーロッパのなかで、最初に日本という国について言及したのは、イタリア人、ヴェネツィア共和国の商人マルコ・ポーロ(Marco Polo, Venezia 1254-1324)である。彼の口述によって記された旅行記 *Il Milione* 『東方見聞録』において、日本を指した「チパング Cipangu/Cipango (ジパング Zipangu)」の記述があり、ヨーロッパに広く普及した書物(写本だけでも150種類、印刷本は数え切れないほど)である。

しかし、日本とイタリア人の最初の接触は戦国時代に入ってから、主にキリスト教の宣教師を通してである。日本で活躍したイタリア人伝道師に、イエズス会のオルガンティノ・ネッキ・ソルディ(Organtino Gneccchi Soldi, 1533-1609)やアレッサンドロ・ヴァリニャーノ(Alessandro Valignano, 1539-1606)¹が有名である。とくにヴァリニャーノ巡察師は、1581年にイエズス会員のための宣教のガイドライン、*Il Cerimoniale per i Missionari del Giappone* (日本の風習と流儀に関する注意と助言)を著し、第1回日本巡察にもとづいて執筆されたSUMARIO de las cosas de Japon (『日本諸事要録』、1583年)、なお『日本巡察記』の報告書とともに、未完になった*Historia del Principio y Progreso de la Compania de Jesus en las Indias Orientales* (1542-64年間)や*Del principio y progreso de la Religion Christiana en Japon* (1601)などの大作も記し、ルイス・フロイスとジョアン・ロドリゲスの著書と並ぶ歴史に残るものである。また、1582年(天正10年)には九州の戦国大名が4人の少年使節をローマ教皇の元に派遣した天正遣欧少年使節の企画を立案し実施した人物でもある。イタリアを中心に天正少年使節団の大反響に触発されたもの(Guido

¹ Centro Internazionale Alessandro Valignano アレッサンドロヴァリニャーノ国際研究所
<http://www.valignano.org/jp/bibliografia>
A. Boscaro, *Ventura e sventura dei gesuiti in Giappone (1549-1639)*, Venezia, Cafoscarina, 2008.

Gualtieri, *Relazioni della venuta degli Ambasciatori Giaponesi a Roma...*, Zanetti, 1586) も数多く発行されたようである。なお、宣教師や商人などの記録、報告、言述・書簡などのもとに、ヨーロッパには16世紀・17世紀に出版された日本に関する書籍は、ラテン語、(ルネサンス時代には、ヨーロッパに出回る書籍のおよそ半分がヴェネツィア製であった) イタリア語を中心に、多数多彩であったようである。²

また、仙台藩主伊達政宗の命により支倉常長を正使とした慶長遣欧使節は1615年1月30日(慶長20年1月2日)にエスパーニャ国王フェリペ3世に謁見して後、ローマに至り、1615年11月3日にはローマ教皇パウルス5世に謁見した。天正使節ほどの盛大な反響ではなかったにせよ、記録のみならず、ヴェネツィア共和国の元首に委託されてドメニコ・ティントレット(Domenico Tintoretto, 1560-1635)が伊東マンショの見事な肖像画を残したと同じように、アルキータ・リッチ(Archita Ricci, 1560-1635)による豪華な『支倉常長像』(1615年、ローマのボルゲーゼ美術館蔵)も残っている。

その後、日本は禁教令を敷いて鎖国の時代になるにもかかわらず、1643年(寛永20年)にジュゼッペ・キアラ(Giuseppe Chiara, 1603-1695)、そして1708年(宝永5年)に(イエズス会の伝道師ではないが)ジョヴァンニ・バッティスタ・シドッティ司祭(Giovanni Battista Sidotti/Sidoti, 1668-1714)というイタリア人が密入国し、捕らえ悲惨な結末になる。しかし、キリスト教布教のために来日したシドッティ司祭との審問に基づいて新井白石が『西洋紀聞』(1715年頃に完成)を筆記、それが1807年以来広く流布されるようになり、鎖国下の日本における世界認識に大いに役立った。

17世紀の半ばにイタリア人イエズス会士のダニエロ・バルトリ(Daniello Bartoli, 1608-1685)が書いた大著 *Istoria della Compagnia di Gesu* (『イエズス会史』)は徐々にアジア編(1653年版)、日本編(1660年版)、中国編(1663年版)、イギリス(1667年版)、イタリア編(1673年版)が発行される。未完でもイタリア文学のなかでも17世

² Sonia FAVI, *Self through the Other. Production, circulation and reception in Europe of written sources on Japan in the "Christian century"*, PhD. Thesis, Ca' Foscari University of Venice, 2013, pp. 196-211. <http://dspace.unive.it/handle/10579/3061>

紀の名文の名著とされ、その中の *Il Giappone* (1660 年版、5 冊 2 巻) もまた、幅広く普及し、愛読された書籍のようである。

このように、このころまで、イタリア人は日本に関する知識を宣教師などが書いた書物だけを介して得ていたのであるが、また、日本に興味を持つようになったのは、19 世紀後半、統一王国になってからである。

しかし、近代になってから日本との関係が強くなった最初のきっかけは政治と貿易である。独立国家になったばかりの当時のイタリアには養蚕業と関連した紡績業などは、国の最も重要な産業のひとつで、ヨーロッパの中で生糸・絹織物の生産量の多い輸出国であった。しかし、1854 年頃から、蚕の伝染病が流行したことにより、養蚕製糸業に大きく依存していたイタリアの経済は致命的な打撃を受けてしまったのである。1860 年代の初めから、イタリア人蚕種仕入人・業者は伝染病に感染していない健康な蚕種を求めて、ベンガル、中国などへ探したが、健康な蚕種が存在する唯一の国は、開国したばかりの日本であった。日本の蚕種の質は極めて良好だったため、1860 年代に日伊蚕種貿易の規模は徐々に拡大し、イタリアは日本にとって産業上、最も重要なパートナーとなったのである。³ こういった状況は日伊外交関係にも影響をおよぼし、1866 (慶応 2) 年に日伊修好通商条約が締結され、1867 年から、イタリアと日本は本格的に国交を始め、公使と領事が日本に派遣される。実は当時、日本在住のイタリア外交担当の代表者であったアレッサンドロ・フェ・ドスティアーニ伯爵の家族も蚕種貿易に携わっていたのであるが、1866 年には、イタリア海軍大尉ヴィットリオ・アルミニオン (Vittorio ARMINJON, 1830-97) が、イタリア使節として日本に赴き、日伊修交通商条約に調印し、1869 年にジェノヴァでその著書 *Il Giappone e il viaggio della corvetta Magenta del 1866* (『幕末日本記』) も出版された。⁴ その後、1873 年に岩倉使節団は、フィレンツェ、ローマ、ナポリ、ヴェネツィア、ミラノなどを視察したが、各地で歓迎され、見聞報告書『米欧回覧実記』(1878 年版) に記されている通りである。⁵

³ 経済史の展望からこの時代の日伊貿易についての諸論文は元ピサ大学のクラウディオ・ザニエル Claudio ZANIER による。R. CAROLI, 1868. *Italia Giappone: intrecci culturali*, Venezia, Cafoscarina, 2008.

⁴ Teresa Ciapparoni, “Al Giappone: scritti di viaggiatori italiani, o in italiano, da metà Ottocento alla fine del periodo Meiji”, in *Studi in onore di Cosimo Palagiano. Valori naturali, dimensioni culturali, percorsi di ricerca geografica*, a cura di Emanuele Paratore, Rossella Belluso, Roma, EDIGEO, 2013.

⁵ 岩倉翔子編著、『岩倉使節団とイタリア』、京都大学学術出版会、1997 年。

19世紀後半に、ジャポニズム (Japonisme) がイタリアでも広がり、日本の美術品の収集家も次第に増えていったが、イタリアの場合、主にお雇い外国人として日本を訪れたイタリア人を中心に、日本美術の重要なコレクションが生まれる。東京の大蔵省紙幣局を指導し日本の紙幣切手印刷の基礎をついたエドアルド・キョッソーネ(Edoardo Chiossone, 1833-98)自身のコレクションが収まったジェノバのキョッソーネ東洋美術館、イタリアのブルボン＝パルマ家の公子エンリコ・ディ・ボルボーネ＝パルマ(Enrico II Borbone-Parma, 1851-1905)が妻と世界一周の旅(1887-1889年)の途中、東洋、日本で買い集めたコレクションになるヴェネツィアの東洋美術館、武器武具などを中心に熱心に集めた(イギリス人の父、イタリア人の母の)フレデリック・スティッベルト(Frederick Stibbert, 1836-1906)のコレクションと豪邸からなったフィレンツェのスティッベルト美術館、東京芸大の前身なる東京工部美術学校で教授した彫刻家ラグーサ(Vincenzo Ragusa, 1841-1927)のコレクションなどが所蔵されているローマのピゴリーニ民族博物館などである。

イタリアにおける日本研究の歴史

以上のような動きはイタリア人研究者にも、研究機関なる大学や日本語教育などにも影響を及ぼした。イタリアにおける日本語教育は、19世紀後半にはフィレンツェの国立高等学校に日本語講座が開設されたことに始まる。この時期から20世紀の初めにかけて、ヴェネツィア、カ・フォスカリ大学の前身なるヴェネツィア商業高等学校、ローマ大学、ナポリ東洋学院(現ナポリ大学「オリエンターレ」)など現在日本語学科が導入されている主要な大学で次々に日本語講座の開設が進んだ。フィレンツェでアンテルモ・セヴェリーニ(Antelmo SEVERINI, 1827-1909)が、初めて日本語講座を開設し、1866年に『日本語会話』のイタリア語版を出している。ヴェネチア、カ・フォスカリでは最初に日本語講座が開設されたのは1873年からで、また1886年にアゴスティーノ・コッティン(Agostino COTTIN)による『基礎日本語』という文法書も出版され、イタリア語で書かれた最初の日本語文法書のようなものである。その他、1890年にジュリオ・ガッティノーニ(Giulio GATTINONI)が記した*Grammatica giapponese della lingua parlata*(『日本口語文典』)も、1908年にはヴェネツィアで『日本語講座』が刊行され、また、1910

年に作家及び語学者ピエトロ・シルヴィオ・リヴェッタ(Pietro S. RIVETTA 1886-1952)の日本語表記に関する教科書、バルトロメオ・バルビ(Bartolomeo BALBI)が『伊和実用宝鑑』も出版されている。

また、セヴェリーニは、Lodovico Nocentini とともに、日本の文学作品をイタリア語に訳し始めた人である。その後、ナポリで教え、ダンウンツィオとムッソリーニとも親交があった下位春吉(1883-1954)も *SAKURA* という文芸誌などのなかで、日本文学の数作品を紹介してきた。続いて、サレジオ会のカトリックの神父として 1929-47 年間、1959-74 年間に日本に滞在したマリオ・マレガ(Mario MAREGA, 1902-1978)も『古事記』『忠臣蔵』の伊訳などを刊行し、戦後はマリオ・テーティ(Mario Teti)と須賀敦子(1929-98)も日本の近現代文学(川端、谷崎、三島、安部公房など)の翻訳に貢献した。特に戦後からは、日本古典文学の翻訳と研究には大きな存在になったのは日本文学史、日本演劇史などを発表したマルチェッロ・ムッチョーリ(Marcello Muccioli, 1898-1976)教授である。

⁶また、黒澤明を初め、日本の映画の紹介をしながら、ムッチョーリの後を継いだジュリアーナ・ストラミジオーリ(Giuliana STRAMIGIOLI, 1914-88)も挙げられる。⁷

こうして、日本の文化に関する研究も始まり、文学、芸術、民族学、歴史、哲学と宗教などについての本も徐々に出版され始めた。⁸

20 世紀前半、日本との文化交流も発展した。1897 年にはじめて日本の美術協会は(1895 年より開催され世界最古)ヴェネツィアのアートビエンナーレに出展して広い反響を呼ぶ。

⁹また、1911 年にローマで開催された博覧会にも日本絵画が展示され、日本画は文学評

⁶ M. Muccioli, *La letteratura giapponese*, Roma, L'asino d'oro, (1969) 2015. M. Muccioli, *Il teatro giapponese, Storia e antologia*, Milano, Feltrinelli, 1962.

⁷ Andrea Maurizi, Teresa Ciapparoni La Rocca (a cura di), *La figlia occidentale di Edo. Scritti in memoria di Giuliana Stramigioli*, Milano, Franco Angeli, 2012.

⁸ A. Boscaro, *Narrativa giapponese: cent'anni di traduzioni*, 『イタリア語になった日本文学』 Cafoscarina, Venezia, 2000.

⁹ ありとあらゆる分野における日伊交流 450 年の歴史についての多彩な研究を集めた論文集として、下記の書籍を参照されたい。A. Tamburello (a cura di), *Italia-Giappone: 450 anni*, vol. 2, Roma-Napoli, Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente, Roma-Napoli, 2003. 明治期日伊交流史について石井元章氏の研究参照。Ishii, Motoaki, *Venezia e il Giappone: Studi sugli scambi culturali nella seconda metà dell'Ottocento*, Roma, Istituto nazionale d'archeologia e storia dell'arte. (2004). A. Boscaro, M. Bossi, *Firenze, il Giappone e l'Asia Orientale*, Firenze, 1999.

論家エミリオ・チェッキ(Emilio Cecchi, 1884-1966)等によって評価された。その後、1930年にもまたローマのパラッツォ・デッレ・エスポジツィオーニ・ディ・ベッレ・アルティの展示場にて大規模な日本美術展覧会が開催された。ムッソリーニ政権の組織的な支援によって実現されたこの展覧会は、大倉喜七郎男爵(1882-1963)の主催で、日本芸術使節の役を担った横山大観(1868-1958)が担当したもので、西洋において初の大規模な日本美術展であり、後に「ローマ展」という名で知られるようになった。日本人の職人達の手によって改装された本格的な日本様式の展示空間の中で、展示作品の多くは近代日本画の傑作で、当時の日本・イタリア両側のマスコミに大きく取り上げられ、大成功を収めた。また、1929年に日本画の本質を説く *Ars Nipponica*(『アルス・ニッポニカ』、日本の美術)という本も限定部数で発行され、特にロベルト・パピーニ (Roberto Papini, 1883-1957) のエッセイ (批評)、イタリアの日本美学の解釈法を示す画期的な参考書になった。¹⁰また、リヴェッタが書いた *La pittura moderna giapponese*(『日本の近代絵画』、1930 版)は、一般のイタリア人に日本文化に対する知識を普及させた。

1939年には日伊文化協定が結ばれた。しかし、この時期のイタリアにおける日本研究は、日伊両国の政治と密接に関連していた。大戦後、このような政治経済との関係からは開放され、イタリアにおける日本研究はますます盛んになった一方である。

現在、イタリアにおいて日本語専攻課程を持ち、日本語の学位が取得できる大学は、ヴェネツィア、ローマ、ナポリにあり、日本研究者の大多数は、この3大学に集中している。その他、ミラノ(国立大学とラビコッカ大学)、トリーノ、ボローニャ、フィレンツェ、ベルガモ、レッツェ (サレント大学)、カターニア (とその分校ラグーサ)、などの各大学にも日本語日本文化のコースがあり、優れた研究者が活躍している。また、小規模ですが、パヴィーア大学、ペルージャ大学、トゥーシャ大学にも日本語講座がある。ヴェネツィア大学における日本語日本文化専攻の学生は3年間の学部では定員制になってから各学年310人、専門課程の学生(大学院生)も入れると、1000人以上で、ヨーロッパの中でも国際交流基金が認めた拠点として、最大規模の日本研究機関になる。ローマ大学は学生数は800人、ナポリ大学は400人ぐらいで、国際交流基金の2014年

¹⁰ L. Sabbatoli, 「アルス・ニッポニカ--昭和5年「ローマ展」と日本画へのイタリア側の批評」 *Studi Italici* (57), 3, (2007-10) pp. 24-326.

度日本語教育機関調査によると、¹¹イタリア全体の日本語学習者は 7420 人で、ほとんど (6069 人) 高等教育 (大学) で学んでいる状況である。

イタリアにおける日本研究の最新の動向—大学を中心に

19 世紀後半から現在に至るまで、イタリアにおける日本研究のテーマは、時代とともに変わってきたが、先駆者による一般的な東洋学、あるいは日本学、日本文化全般の研究から、それぞれの専門分野に分かれ、戦後からより専門的な研究が行われるようになった。

イタリアでは、正式の常設の日本語講座を見ると、最近までは言語と言語芸術である文学が中心、かつ主役であった。しかし、日本語を主眼として他の科目も専門細分化して少しずつ育ってきた。事実、2000 年より始まった大学制度の大改革は、実行された時点から、言語と文学の区別を形式・実質ともにより明確なものにしたと共に、他の専門の自立ももたらし、認めさせるきっかけとなった。そのような独立は、歴史、思想・宗教、美術、芸術などの他の学問にとっても大変良いことである。ただし、イタリアの国立大学、国内の研究機関などには、これから先、多くの専門分野に力を尽くすための体制と予算が備えられるかどうかという問題がある。

イタリアの文化史、伝統のなかで、歴史的展望による研究が多く、文献学、書誌学的研究から文化的な変遷の中の言語、文学、歴史を対象とする学問が主流をなしてきた。現在でも外国語の学部は主に、諸国の言語とともに、かならずその国の文学史を教えるという仕組みになっている。日本語講座のある大学も例外ではなく、そのため、日本文学研究は、作家論、作品論などを中心に、どこの大学でも主役になっている。

ヴェネツィア、カ・フォスカリ大学には現在、アジア・地中海アフリカ研究学科になっているが、日本学も多種多様な分野の専門家がいて、先生方、若手の研究者、院生などの研究も多岐にわたる。日本の思想史、とくに徳川時代の思想、文化史、政治学と国際関係などにわたる博識のパオロ・ベオーニオ・ブロッキエーリ(Paolo Beonio Brocchieri, 1934-91)教授から始まり、ボロッキエーリがパヴィーア大学に移転してからヴェネツィアの日本学の棟梁となったアドリアーナ・ボスカロ (Adriana BOSCARO) 教授が、キ

¹¹ <https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/italy.html>

リシタン世紀とイエズス会の伝道師の記録、豊臣秀吉などの研究、日本史から徐々に日本文学に移り、古典文学、平賀源内、谷崎潤一郎、遠藤周作などの幅広く優れた論文と翻訳を通して、現在の拠点の確固たる基盤を築いた。

イエズス会、キリシタンの研究から、古文、日本語史へと広がったアルド・トッリーニ(Aldo TOLLINI)の研究活動は、ボスカロ先生の流れの一部を汲んで、また思想の方面、仏教哲学、禅と道元、茶道の文化などへと展開し、貴重な著書を生んだと言える。他方、彼の弟子にヴァレリオ・アルベリッツィ(Valerio ALBERIZZI)のように古文、国語史、文体史(和漢混交文など)、仏教典などの漢文に記入されて来た古訓点などの精密な調査研究を日本で続けている。

人類学の観点から、ブロッキエーリの後を継いだマッシモ・ラヴェーリ(Massimo RAVERI)は思想史、哲学のなかで、とくに日本の宗教、神道や民俗学、民間宗教、現代の新興宗教などに関心を持ち、イタリアでは専門の第一人者として、国際的に活躍している弟子(Fabio Rambelli, Lucia Dolce, Federico Marcon, Erika Baffelli, Andrea De Antoni, Tatsuma Padoan など)も多く育てた。人類学の方面に若手のジョヴァンニ・ブリアン(Giovanni BULIAN)は神島などの調査研究を行い、漁師の町村、日本の漁業、風、海などに関する独創的研究を続けている。

ボスカロ先生の文学研究の後継者としてルイーサ・ビエナーティ(Luisa BIENATI)は文学、物語論の確かな方法論に基づいた作家論、作品論、日本近現代文学史の入門書と専門書、永井荷風、谷崎潤一郎、井伏鱒二、原爆文学などの研究・翻訳で注目し、実り多い成果をあげている。より伝統的な観点から古典文学、とくに古代の物語文学、『住吉物語』、『更科日記』、『紫式部日記』などの翻訳と解説などを著しているのはナポリ大学出身のカロリーナ・ネグリ(Carolina NEGRI)である。若手研究者では、ピエラントニオ・ザノッティ(Pierantonio ZANOTTI)は小説が主流になっているイタリアの従来の研究と違って和歌(藤原定家)から近現代詩、山村暮鳥や未来派などのアヴァンギャルドの革新的な論文から現代のゲームの世界などへの関心を広げている。また、カテリーナ・マッツァ(Caterina MAZZA)は現代文学のなかでも、井上ひさしのパロディー文学をはじめ、荻野アンナのような女流文学、多和田葉子のようなニヶ国語で書く作家の作品などの新傾向に注目している。

日本語の分野には、言語学と国語史の視野に立って日本語の多方面（明治時代の日本語、坪内逍遙から最近の言語をめぐる社会現象まで）を捉えるパオロ・カルヴェッティ（Paolo CALVETTI）も、社会言語学の立場から琉球諸語とアイデンティティーの問題、周辺的な言語、消滅危機言語をめぐる多大な成果をあげているパトリック・ヘインリッヒ（Patrick Heinrich）も、琉球語と音韻の問題に注目している若手の研究者ジュセッペ・パッパラルド（Giuseppe Pappalardo）もいる。

日本史の分野では、日本のファシズム、日本の近現代史において特に政治問題と太平洋における国際関係の諸領域（ヴェトナムなど）を扱ったフランチェスコ・ガッティ（Francesco GATTI）先生の教え子として、ローサ・カーロリ（Rosa CAROLI）もまた日本史、沖縄史、国際関係などについて業績をあげている。若手研究者には、日本の近現代史のなかで政府体制、政治・経済と選挙の関連、農業問題などに注目しているアンドレア・レヴェラント（Andrea REVELANT）も、また、歴史学の観点から、16世紀、17世紀のヨーロッパ・イタリアが宣教師などの記録を通して見た日本、日本の知識とイメージ、イタリアにおける和書、日本をめぐる書籍の調査研究などを行っているソニア・ファヴィ（Sonia FAVI）も期待できる。

美術の分野は、日本美術と美学、浮世絵の作品とその巨匠北斎、広重、歌麿などの多数の書籍を編みながら、展覧会などにキュレーターとして直接携わったジャンカルロ・カルツァ（Giancarlo CALZA）の後、ジャポニズムと浮世絵、葛飾北斎と広重などの基礎的な研究を新鮮な感覚で紹介しているシルヴィア・ヴェスコ（Silvia VESCO）が代表している。

ヴェネツィアで舞台芸術の分野を切り開いたのは主に能楽、横道萬里夫などの能の構造の分析をふまえた演劇学の研究に独創的な感覚を注いだパオラ・カニョーニ（Paola CAGNONI）であるが、その跡を継いだボナヴェントゥーラ・ルペルティ（Bonaventura RUPERTI）は人形浄瑠璃、近松門左衛門、近世演劇、近世文学（泉鏡花の作品と戯曲）、日本舞踊、ドラマツルギーとしての日本演劇を扱う日本演劇史の研究を続けてきた。また、舞踏、コンテンポラリーダンスなどの現場での研究をしているカティア・チェントンツェ（Katja CENTONZE）も比類のない研究活動（日本現代文学、三島由紀夫と舞踏

の関わり、舞踏、現代舞踊、モダンダンス、現代演劇など)をしている。¹²

最近、学生の関心を集めている大衆文化の研究には、M. Roberta NOVIELLI ロベルタ・ノヴィエッリが映画史、日本映画と日本近現代文学、アニメの論文、多数の業績を上げているが、エウジェーニオ・デアンジェリス (Eugenio DE ANGELIS) のような有望な若手研究者も育って、国際映画祭等に参加しながら専門雑誌などに評論を投書し活躍している。¹³

三宅トシオ (Toshio MIYAKE) も社会学とカルチャースタディーズの展望からマンガ・アニメ、若者文化の諸現象、日本現代文学におけるイタリアのイメージ、イタリアにおける日本のイメージ、その変遷などの吟味に貢献している。マルチェッラ・マリOTTI (Marcella MARIOTTI) は日本語、日本語教授法などの研究と実施をしながら、社会学の視点から児童文学の研究と翻訳 (イタリアでも大ヒットとなった『世界の中心で、愛をさけぶ』、『はだしのゲン』、童話集など) も数多く出している。

また、東洋美術、仏教思想、韓国との交流なども検討したところで新鮮味を出しているクレメンテ・ベーギ (Clemente BEGHI) もあげられる。

以上はヴェネツィア大の研究者陣であったが、ミラノには日本語日本文化講座を設けている大学が三箇所あり、ピッコカとミラノ国立大学は主で、また私立のボッコーニ (経済大学) にも日本経済の専門家がいて、少し日本語講座もある。ピッコカにはローマ大学出身の アンドレア・マウリツィ (Andrea MAURIZI) は『懐風草』、『新猿楽記』、『浜松中納言物語』、『落窪物語』のような主に古代文学の翻訳と解説、また近世には『男色大鑑』などの翻訳もあり、多彩な活動を行っている。ミラノ国立大学には シモーネ・ダッラキエーサ (Simone DALLA CHIESA) と、若手に ティツィアーナ・カルピ (Tiziana CARPI) は人類学、社会問題と現象を取りこみながら、日本語と言語学に力を入れている。また、 ヴィルジニア・シーカ (Virginia SICA) は、三島由紀夫を中心に日本近現代文学のみならず中世の五山文学などの研究で、文化担当になっている。そしてボッコーニ出身のコッラード・モルテーニ (Corrado MOLTENI) は カルロ・フィリッピーニ (Carlo

¹² 実は、舞踏についての関心も高く、舞台やワークショップだけでなく、研究の面でも舞踊研究者、評論家 (マリア・ピア・ドラーツィ Maria Pia D'Orazi など) などの論文もある。

¹³ 映画の分野でも、日本専門の評論家 (ダリオ・トマーシ D. Tomasi 等) もおり、国際映画祭 (イタリアでは世界で一番古いヴェネツィア映画祭のほかに、日本、韓国、中国などの大衆映画を紹介する極東ウーディネ映画祭も人気を集めている) 等に参加し、専門雑誌などに批評、論文を書いている。

FILIPPINI)とともに、日本経済の貴重な専門家である。最後に、日本美術の分野に、写真美術と浮世絵、¹⁴デザインと美学などの論文を出しているカルツァ先生の弟子ロッセツラ・メネガッツォ (Rossella MENEGAZZO) もいる。

ミラノ大学とともにトリノ大学に西川一郎とともに最初から日本学、日本文学研究を築いたのはマリオ・スカリーセ (Mario SCALISE) 先生である。しかし、実はスカリーセ先生の父 (グリエルモ・スカリーセ大将, Guglielmo SCALISE, 1891-1975) も 1934-39 年の間日本に軍事担当として滞在し、暗き時代の中でも日本の文化に魅せられ、その後、伊日辞典 (1940 年版) も翻訳も出版しミラノ大学で日本語日本文化を教えた家柄である。

¹⁵グリエルモ・スカリーセ大将の婿に、サンテ・スパダヴェッキヤ大将も舅に感化を受け、日本の文化に熱心になり、アジア文化センターを開設し、娘ニコレッタ・スパダヴェッキヤ (Nicoletta SPADAVECCHIA) も IsMEO(中亜極東協会、1933 設立)、現在の IsIAO(アフリカ東洋研究所)のミラノ分校で日本語日本文化を教えながら、夏目漱石、大江健三郎などの文学作品、土居健郎などの翻訳を出している。

現在、トリノには日本近現代文学の専門、特に三島由紀夫に傾倒しているエマヌエーレ・チッカレッラ (Emanuele CICCARELLA) と現代文学の多数の新鮮な翻訳 (大江健三郎から桐野夏生、高橋源一郎、古川日出男まで) を次から次へ出している安部公房の演劇、現代文学専攻の ジャンルーカ・コーチ(Gianluca COCI)である。また、若手に ダニエーラ・モーロ(Daniela MORO)はジェンダー文学、女流作家と演劇、円地文子、野上弥生子などの論文を発表している。そして、ラヴェーリ先生の弟子で、日本思想史、京都派、西田幾多郎などの本格的な思想研究をしているマッテオ・チェスターリ (Matteo CESTARI) が東洋哲学の有力な担当である。

ポローニャ大学には、外国語部と文学部に別れていたが、フォルリーのキャンパスは言語学、音韻学専門の上山素子 (UEYAMA Motoko) が、ポローニャ本校は日本語教授法

¹⁴ 日本を撮影した初期の写真家フェリーチェ・ベアト (Felice Beato, 1832-1909) もヴェネツィア生まれで、横浜を拠点にその後活躍したアドルフォ・ファルサーリ (Adolfo Farsari, 1841-1898) もヴィチエンツァ生まれで、イタリア人である。

¹⁵ 和伊辞典には、バルトロメオ・バルビの初期のもの(1939 年版)の後、ヴァッカーリ(Oreste VACCARI, 1886-1980)の辞書と文法(1956 年版)も出版されている。その後、マリオ・スカリーセも文法と漢字辞典を出している。ヴェネツィアには、久保田陽子が執筆した『現代日本語文法』(Grammatica di giapponese moderno, Venezia, Cafoscarina, 1989 年)は画期的なもので、今でも重宝されている。また、ローマ大学では Mastrangelo, Ogawa, Saito, Grammatica giapponese, Milano, Hoepli, 2006 も。なお注目すべきである。最近出版されたものとして、ミラノの Susanna Marino, Grammatica pratica di giapponese, Zanichelli, 2008、そして漢字辞典として

などに新技術を取り入れた実験的な研究（大衆文学、推理小説の翻訳も）を行っているフランチェスコ・ヴィトゥッチ(Francesco VITUCCI)とともに、近現代文学、女流文学、映画との関係について幅広い活動を繰り広げているパオラ・スクロラヴェツァ (Paola SCROLAVEZZA) が支えている。他方、日本学系の学者ではないが、ポローニャ大学舞台芸術学科のジョヴァンニ・アッザローニ (Giovanni Azzaroni) とその弟子マッテオ・カザーリ (Matteo Casari) などのように、演劇の専門家として、歌舞伎、能、伝統演劇の伝承の方法、実際の稽古の体験などを人類学的方法論を通して、舞台芸術としての能やその他の演劇を見る立場に立っている研究者も力添になっている。¹⁶なお、ポローニャ大学の文学部には日本語担当の竹下敏明のほかに、英山などの浮世絵の研究調査などを行った近藤映子とともにポローニャで東洋美術センターを指揮しているジョヴァンニ・ペテルノッリ (Giovanni PETERNOLLI) が資料、文献を提供したり、展覧会を企画したりする機関のなかで、日本美術の専門家である。

この分野では、ジェノヴァのキョッソーネ東洋美術館館長のドナテッラ・ファイツラ (Donatella FAILLA) 女史がキョッソーネ美術館の素晴らしいコレクションを支えながら、ジェノヴァ大学でも教え、優れた研究を続けているように、大学人のみでなく直接作品にふれる他の分野の研究活動も大事な役割を果たしているといえる。

フィレンツェ大学の文学部には日本語日本文化講座は、チベット研究の第一人者ジュゼッペ・ツッチィ (Giuseppe Tucci, 1894-1984) について東洋学者になり、アイヌ、海女などの日本研究の草分的かつ魅力的な存在だった人類学者、登山家、写真家、ジャーナリストのフォスコ・マライーニ (Fosco MARAINI, 1912-2004) によって創設されたが、現在鷺山郁子 (SAGIYAMA Ikuko) が、『万葉集』、『古今和歌集』の伊訳など、和歌文学から近代詩歌 (萩原朔太郎など) まで優れた成果をあげている。また、フランチェスカ・フラッカーロ (Francesca FRACCARO) は和歌とともに、物語文学、中世文学、『方丈記』、『蜻蛉日記』等の翻訳に取り組んだ。若手のエドアルド・ジェルリーニ (Edoardo GERLINI) は和歌と漢詩の影響関係、菅原道真、比較文学の展望から見たイタリア中世の詩歌と和歌など、古典文学の中でも革新的な広がりを見せている。

は、Simone Guerra, Grande dizionario giapponese-italiano dei caratteri, Zanichelli, 2015 も大変貴重なものである。
¹⁶ 日本演劇については英語から訳されたベニート・オルトラーニや演劇学の専門家ジョイア・オッタヴィアーニの著書もある。Benito Ortolani, *Il teatro giapponese, dal rituale sciamanico alla scena contemporanea*, Bulzoni, 1998. Gioia Ottaviani, *Introduzione al teatro giapponese*, Usher, 1994.

なお、フィレンツェには浮世絵のコレクターと愛好家、美術の専門家マルコ・ファジョーリ (Marco FAGIOLI) がロンドンなどよりも早く70年代 (1977年) からほとんど毎年日本の春画の本、カタログ、解説書などを数多く出版しその展覧会にも携わっている。ローマの「ラ・サピエンツァ」大学には『源氏物語』の初イタリア語訳とともに古典文学から近現代文学まで、夏目漱石、石川淳、太宰治など、多大な業績を積んできたマリア・テレサ・オルシ (Maria Teresa ORSI) の跡を継承したマティルデ・マストランジェロ (Matilde MASTRANGELO) は幕末と明治の文芸、森鷗外と歴史小説、近代文学と落語、講談など、三遊亭円朝と怪談の論文で貴重な存在である。また、ジョーヤ・ヴィエンナ (Gioia VIENNA) は現代文学、女流作家などの作家論などを続けている。若手にルーカ・ミラーシ (Luca MILASI) も坪内逍遙、幸田露伴などで、ステファノ・ロマニョーリ (Stefano ROMAGNOLI) も戦争文学と紀行文学 (火野葦平など) で、それぞれ近代文学あるいは昭和文学に注目している。他方、ローマ大学出身のロベルタ・ストリッポリ (Roberta STRIPPOLI) は中世文学、物語、御伽草子などの翻訳と研究をしてきたが、現在アメリカの方で活躍している。

また、日本史の専門家として、マルコ・デルベーネ (Marco DEL BENE) は日本史、近現代史などにおけるメディア、新聞・ラジオ、歌謡曲、映画などの役割についての貴重な研究をしている。日本美術史を担当しているサドゥン (Daniela SADUN) と、日本近現代文学、芥川龍之介、女流文学、イタリアと日本との交流の研究をしてきたテレサ・チャッパローニ・ラロッカ (Teresa CIAPPARONI LA ROCCA) はストラミジヨリの教え子である。

ローマには日本の音楽、『源氏物語』における音楽、神楽などの研究をしているダニエーレ・セステイーリ (Daniele SESTILI) もいて、現代音楽の作曲家、能の音楽とフルクサス (Fluxus) のようなアヴァンギャルドなどの研究をしているトリノー出身のルチャーナ・ガッリアーノ (Luciana GALLIANO) とともに、邦楽の研究には大変貴重な存在である。

最後に、日本思想史、古文、仏教、宗教などの研究にはナポリとローマで活躍したシルヴィオ・ヴィータ (Silvio VITA) は今日本在中である。

ナポリ、東洋大学は日本文学研究の先駆者マルチェッロ・ムッチョーリの後、日本美術、

日本史、日伊の交流などの多彩な研究を繰り広げたアドルフォ・タンブレロ（Adolfo TAMBURELLO）が多くの弟子を指導してきたが、現在日本語担当の大上順一（OUE Jun'ichi）とシルヴァーナ・デマイオ（Silvana DE MAIO）はそれぞれ比較言語学、日本語・イタリア語の対照研究と日本語、明治史、御雇外国人などをめぐる研究をしている。

また、文学のほうでは、ジョルジョ・アミトラノ（Giorgio AMITRANO）は日本近現代文学のなかでも中島敦、吉本ばなな、村上春樹、井上靖などの研究と翻訳をとおして紹介し、業績を上げ、若手にはキアラ・ギディーニ（Chiara GHIDINI）は古典文学と宗教思想などについて、ジュセッペ・ジョルダノ（Giuseppe GIORDANO）は『新古今和歌集』、クラウディア・イアッツェッタ（Claudia IAZZETTA）は能について、ガラ・フォッラーコ（Gala FOLLACO）は永井荷風から近現代文学にわたる論文を出している。

政治学部のほうに、日本史、日本政治史、日本の国際関係に関するスケール大きく視野広い論文を著したフランコ・マッツェイ（Franco MAZZEI）とその弟子ノエミ・ランナ（Noemi LANNA）が担当している。など、ヨーロッパ（イギリス東インド会社など）、日本・中国の国際関係史、海洋貿易と海賊などをめぐる研究をしてきたパトリツィア・カリオーティ（Patrizia CARIOTI）とコモ近辺の大学に同様の日本史の研究をしているティツィアーナ・イアンネッロの若手研究者もいる。サルデーニャ島（サッサリ大学）にまた日本史の専門家としてパオロ・プッディーヌ（Paolo PUDDINU）も活躍している。レッチェにあるサレント大学にはマリア・キアラ・ミリオレー（Maria Chiara MIGLIORE）は古代文学、『唐物語』、『万葉集』、日本文学と漢文学の関係、また若手にアントニオ・マニエーリ（Antonio MANIERI）は古代文化、『常陸風土記』の翻訳、馬をめぐる文化と言葉などの研究を展開している。

最後に、シチリア島にはカターニア大学と分校のラグーサには、パオロ・ヴィッラーニ（Paolo VILLANI）は『古事記』、本居宣長、神話などの研究、とルーカ・カッポンチェッリ（Luca CAPPONCELLI）は萩原朔太郎、与謝野晶子のように近現代詩などに注目している。

このように、イタリアの大学の高等教育、研究機関における研究活動を行っている日本の研究者、学者の実例とその研究テーマを概観してみたが、あらゆる分野で、専門的知識と豊富な研究成果をあげてきたと実感出来るかと思われる。

そして、まず、全体の傾向としては、北ヨーロッパ諸国と違って、近現代の文化現象のみならず、古典などの研究も重要な基盤となっていることが明らかに窺える。それに合わせて学生の教育も、現代言語を初め、漢文、和文などの古文に対する読解力とともに、文学、宗教、歴史などの他の分野でも古代から一通り研究する姿勢を崩さないで、しっかりした基盤に立った学習者、若手研究者、柔軟性のある人材を育てることを重視し、一人前の研究者としての育成、自立のところまで、求める努力が認められる。古典の研究ができる人材は現代の研究も兼ねてできるようになるが、逆の方向はなかなか出来ないのは事実のようである。そして、古典的な文献の現理論的な研究、それに基づいた教育の基礎を捨てないで、古典の資料の読解力にも基づいた高度な専門性とともに、歴史に伴う変遷と本質、細部と全体像とに焦点を合わせ、教育にも全体の通時的な知識、歴史的な展望に立った吟味と把握、厳密な解釈と想像力、柔軟性と総合性を重視してきたといえる。

しかし、今でも、ヨーロッパと同じように、政治体制・経済の多種多様な問題に悩み、不景気や停滞、不振に苦しむ日本なのに、イタリアでは、日本文化に関心を持って大学で日本語を学ぼうとする学生の人数が依然として減らないのは、なぜであろうか。

著しい経済発展の高度成長の絶頂を経てきた日本であるが、今やヨーロッパ諸国、アメリカ等と並ぶ、優れた伝統と洗練された美的創作の付加価値による、高度の資質を備えた豊かな文化活動、文化現象などを提供する国となって、恐るべき経済力の迫力のみならず、文化の多方面から訴える魅力のある国の、より安定した時代に入ったといえる。もっとも、経済成長を支えてきたのは、文化の高い水準、就学率、教育兼学問の普及、知識と教養、芸術と技術に対する関心、精密性と厳格性のある繊細な精神と感性なのではないであろうか。他方、それに反して、実用主義・功利主義に傾きがちなところもあったその経済発展が時には文化のいろいろな側面を犠牲にしてきたのも、否めない事実

である。

しかし、喜ばしいことに、文化のあらゆるレベルでも国際的に認められてきたのも、日本に対する態度の現状であると言える。

日本現代文学も徐々にイタリアの読者に馴染みのあるものとなり、日本料理もイタリアの一般の消費者・美食家にとってちょっとした流行になっている現在、日本文化の魅力のあると思われる分野が増えている中、芸術の多彩な現象をめぐる大衆文化が主役である。

十何年前から、イタリア（ヴェネツィア大学に限らず）の日本語学科の学生に日本語を勉強している動機を訪ねると、日本のマンガ、アニメを通してなんとなく日本文化に興味をもったと答える学生が多いようである。アニメ・マンガに対する若い世代の関心は、言うまでもなく、少年の頃、日本のアニメ・テレビ番組の下で育ってきた感化によるのであるが、やはり、大学へ進むと、単なる趣味としての表層的なレベルを超えるし、より意識した立場から日本の文化に近づいていくプロセスのなかで、興味も関心も研究も多彩化していく。実際は、若手研究者のレベルになると、やはり、大衆美術から高級文化までバラエティに富む日本のマンガ・アニメの膨大な世界にとどまらず、他の研究テーマに関心を広げているようである。

もちろん、それと同時に、映像文化の実状について、学術的な洞察力を示している本も出てきている。日本漫画史、漫画・アニメ辞典、漫画家論（手塚治虫、宮崎駿など）、作品論（ジャンルーカ・ディ・フラッタ（Gianluca Di Fratta）など）もあれば、日本漫画やアニメの根底にある世界観などのようなものについて考えようとするもの[パドヴァ大学美学の専門家なるマッシモ・ギラルディ（Massimo GHILARDI）, *Cuore e acciaio*, Esedra, 2003]もある。また、ずっと広い視野で、現在の日本社会の諸異相への関心を証明しているものとして、アレッサンドロ・ゴマラスカ（Alessandro Gomarasca）、ルーカ・ヴァルトルタ（Luca Valtorta）編, *Sol mutante* (Costa e Nolan, 1996)とゴマラスカ編, *La bambola e il robottone...* (Einaudi, 2001)という論文集も90年代からどんどん出てきた。伝統的にイタリアでは強く根付いていた歴史的展望から、より社会的な視野に移って現在の日本を見直そうとする動きが窺える。そして、そのような研究者側の動向と共に、読者・一般享受者などの嗜好、関心も変化してきたと言える。

日本美術の典型的なテーマ、浮世絵をめぐる世界、ジャポニズムのようなヨーロッパ美術との影響関係などに関する研究が相変わらず主流をなす傍ら、日本美術の新しい側面、そして、日本古美術の知識や学力を育ててきた学者も増えたと同時に、日本におけるアバンギャルド、デザイン、コンテンポラリーアートについて、日本現代美術の多岐にわたる創作活動などにますます好奇心を示している専門家も 増えつつある。展覧会の都度に出た論文集を含むカタログも、一般読者向きへの解説もあれば、より専門的に細かい問題を取り上げる研究も、若手研究者の中には生まれつつある。

国際的に高く評価され活躍している日本人の中で、建築家（丹下健三の時代から、安藤忠雄、黒川紀章、磯崎新、伊東豊雄、妹島和世、隈研吾など）はもちろん、美術（村上隆）や舞台美術などの世界にも楽しみながらファッション界の先端に立っているスタイリスト（三宅一生、山本耀司等もその代表であるが）、それらの活躍ぶりも若手研究者の注目を浴び、論文の対象になっている。日本の伝統の染色、織物、着物などの技術、色、文様、美学などの研究と展覧会も現れ、これも確かに見逃せない日本美術の一面である。

一般読者の関心の新傾向を示すものとして、いままでイタリアの出版社は、小説の翻訳や人類学的なジャーナリズム以外、一般の読者を相手に日本に関する書物としてあまり専門的な論文集・学術書を発行しようとしなかったようである。しかし、最近、専門的な日本文学、日本史、日本美術、日本の思想と宗教、各分野に関する著書も大規模の出版社により発行されているので、かなりの読者層が日本文化に関心をもっていることを証明している。

それと同時、イタリアにおける日本学関連研究者ではないが、日本文化、芸術に興味を示している著者、学者もかなり多くなってきている。一般の享受者も、研究者、専門家も、他の分野との関わりを無視出来ないとして、学際性、多彩な学問分野間の共同研究という広がりをもったものを好むような時代風潮にある。なお、ヨーロッパと日本も示している傾向として、学際性というものと並行して、地域に束縛されず、たとえば中国、韓国なども含むより広い範囲の中で一つの分野の断層を捉えようとする研究態度も著しくなった。日本のみでなく、東アジアのなかで、同じ現象と多種多様なアспектをつかむと、趣が異なるがために、やはり示唆に富んだものとして比較論にまで広がる傾

向が見える。

そして、マルチメディアリティーという世界のなかで、映像・音響などの多次元を通して訴える表現が好まれる時代にあるのも確かなことである。ネットのサイトなどに幅広くアジアの映画、アニメ、演劇、舞踊などの文化現象群を専門家によって紹介し、研究資料及び年表、批評、論文などのかなり充実した情報を提供してくれるものが現れ、思いもよらぬ勢いで認められ、専門雑誌にも評価されている。

実は、イタリア日本研究学会(伊日研究学会)(AISTUGIA, Associazione Italiana per gli Studi Giapponesi)も

<http://www.aistugia.it>

1973年にイタリアにおける日本研究を促進する目的で創立されて以来、現在、400名以上の会員を擁しているが、イタリアにおける日本研究者、学生のみならず、日本に関連する各方面の社会人、日本に真摯な関心を抱く一般人等を糾合する方針をとって主張している。イタリア最大の組織として、年次研究会議、論文集発行を初めとする活発な活動を展開している。研究会議は毎年行われ、年々発表者が増える一方である。それに応えて、3日にわたる学会のスケジュールも分野別にわかれ、研究発表が同時平行して行われるようになってきている。若手研究者が多くなっただけでなく、研究テーマ、専攻もバラエティに富み、広がっている。若手研究者の積極的な参加、ますます深まる専門知識の実力による学芸研究の細分化と充実性というものが一番際立つところである。

また、それとは別に、比較研究の展望から毎年異なる研究課題を扱う学会・シンポジウムも各大学、各機関に大変著しい発展を見せ、文学、歴史、社会、宗教、思想、美術、演劇、音楽などの境なく、日本に関わる人文科学領域全般を対象として、他の分野の専門家も交えて、大変興味深い機会となり、実り多い成果をあげて成功をおさめている。日本もイタリアも近代国家になってから国交を樹立したのは1866年8月25日だったので、2016年は国交開設から150年目に当たる。日伊国交流150周年のために、イタリア及び日本の各地で、文化事業を中心に、いろいろな行事、催し物、イベントなどが実施されている。しかし、見てきたように、イタリアという統一国家がまだ存在していなくても、日本の正式の大使ではなくても、政治政権の代表ではなかったとしても、イタリア人と日本人との間に、450年近くの交流があった。「国と国との関係とは

、詰まるところ人と人との関係です。…日伊両国及び両国民の相互理解が一層促進され、かつ、二国間関係の新たな展望が拓かれる契機となることを期待¹⁷できる時代になった。時代の長い流れの中で、人間による劇的な出会いもあったが、近代になってから、特に、それぞれの国民の文化の理解と知識が深まり、まず文化活動、文化研究、人文科学の今までの研究の積み重ねのおかげで、見事に出来たことである。今後の研究も美しい花を咲かせることが期待できる。先生と学生の、互いと個人個人の、今後の努力次第である。

「遊楽万曲の花種をなすは、一身感力の心根也」（世阿弥、『遊楽習道風見』）

¹⁷ 在イタリア日本国大使、梅本和義による『梅本大使ご挨拶』。
<http://www.it.emb-japan.go.jp/150/jp/saluto.html>